

WORLD VIEWPOINT



変革の21世紀!

「自分の考え」で動ける人間に

前例はもう通用しない

先回は、20世紀に「あたりまえ」だったことが、いろいろな分野で通用しなくなるのが21世紀である、なんていうことからお話をすすめていきました。

ぐるりと、皆さんのまわりを見回して考えてみていただけましたか?

親や先輩や上司の言うことを、つつがなくすなおに聞いて、その通りに生活していく良い子で、ききわけが良く、しかも反抗もせず、波風もたてない……そんな生き方をしてきた子どもや、青年や、大人が、学校や会社や社会で、どんな毎日を送っているか。

もちろん、すばらしい人たちもたくさんいるでしょう。でも、地球規模で、一刻と物事の変化が着実に、しかも広範囲に渡って起きていく現在では「前例」や「慣習」や「経験則」のパワーは、見る間に低下してきます。

前人や、歴史や、経験には、すなおに心を開いて学ばせてもらおう。これはまずもって大切な、はじめの二歩だと思えます。

でも、新しい世紀に、最も大切なマイルドは「自分はどう考えるのか」。この

力です。

深く、静かに己れの考えをまとめる。そして、たとえ前例になくとも、また、周囲からの批難があろうとも、おだやかに恐れることなく、自分の考えを表明し、まわりとの議論を展開していける、この力があるか、ないか。

最も大切な「基礎的人間力」のひとつだと思います。

外務省の不祥事が次から次へと明らかになってきました。国際政治においても、20世紀の後半半分の「あたりまえ」だった東西冷戦のパラダイムだって、もうありません。

東西の西側に属していた我国は、とにかく、西の正横綱アメリカの背中にくっついていけば、大関の地位は危うくなることはなかった。だから、独自の外交政策のタクティクス(戦略や戦術)など考える必要もなかったわけです。

いえ、あえてもう二歩踏み込んで言えば、独自のやり方など考えたら、横綱にヒシヤリとおしかりを受けるくらい、素直な二番弟子だったともいえるでしょう。

「ベルリンの壁崩壊」などというニューズは、もう遥か大昔のような気もしてきますが、あれから15年近く。安全保障

しかり、経済貿易圏構想しかり。昨今のみじめなスキャンダルなど言うには及ばずですが、やはり、上司や先輩の教えにひたすら忠実で、おりこうさんの身の処し方だけにタケてきたエリート陣には、もう変革期のカジ取りはまかせられない。そんな思いを強くする毎日です。

この「ワールド・ビューポイント」というコラムでは、その時々々の世界の時事問題をとらえて、分かり易く解説をしてくださいます、というご依頼を受けました。それなのに何故、こんなパラダイムチェンジのことばかりお話しするのか。

その答えは、「時事問題」の内味は、それこそ千差万別、いろいろな事ながらに及ぶのですが、それを知ったり考えたりする、分かりたいと思う、その心は何か。という、この点を、常にクリアにしておきたいと考えるからなのです。

「情報化時代」という言葉通り、私たちのまわりには、ありとあらゆる出来事や数字や物語が飛びかきます。でも、それらは「私には関係のないこと」と、落ち着いて見直してみると、ほとんどのことが、どこでもよいことのカタマリでもあることに気が付きます。

何も、アップアップ焦ったり、イライラすることなどありません。そう、ここにおいて、主人公は、あくまで「あなた」自身。自分にとって、その事がらやデータは必要なのか否か、です。

とりわけ、この雑誌は「ヘアレックス」としてのご自身、つまり、子どもとの接点

において、子どもにとっても、そして、当然で自分自身にとっても、より良き生き方や、あり方を考える何がしかのヒントがあれば、と思いつながらまじつとお読みいただいているのだ、と思っています。

だから、とりわけ「子育て」「良い」とどうしても、今までの日本で「良い」とされてきた価値のめもりが、ほとんど通用しない状況が地球上に広がっていきますよ、というところから始めなければ……との思いが、まず先行していることを申し上げさせていただきます。

子供は可能性のカタマリ

親や先生の言うことにひたすら良く従う「みんな揃って、みんな良い子」ではもうダメです。

「みんな違って、みんな良い子」でなければ幸せな社会生活は営めないでしょう。

何故か。簡単です。だって、私たち一人ひとりの人間は、みんな違うのですから。

同じ親から生まれた兄弟姉妹でも、同じ顔という存在を私たちは見たことがありません。顔という単純な要素にしてしかり。何千億個といわれる細胞が複雑に作用しながら形成される脳の働き、つまり思考や性格や能力が同じであるみんな揃っている人類など二人として存在しないのです。

その子は、地球上で、その子にしか出来ないことばかりのカタマリなのです。

今、「親」なんてなことをやらせてもらせる年齢になって、あらためて自分の親を見てみる。(私など頭のおがらないことばかりですが)良いも悪いも、共通項は様々あれど、やはり、全く別ものの個性であることが、とてもよく分かります。

それと全く同じこと。どうしても、サイズも小さければ、言うこともやることも稚拙で心もとない。となれば、親としては、上から「ご指導ご鞭撻ムード」で、小さきものたちに接してしまいがちです。が、だめダメ。

彼等には、私たちなどおよびもつかないほどの豊かで、柔らかな可能性ばかりがつまっていますから。ハメない、固めない。自分を押し付けない。とりわけ、地球の大転換期なのです。

肩書きよりも

「ハダカの内味」

たまさか世界一、二の債権国に50数年で登りつめてしまった国なので、その昭和の時代に通用した「学歴」だの「社名」だの「レッテル」が、なんとしても、子どもの将来にとって必要不可欠な要素だ、と考えてしまうことは、ある意味仕方ないことかもしれません。

でも、幸いなことに(まあ、中にはとても不幸なことだわい、と感じてしまう不幸な方もいるかもしれません)どここの家系に生まれたから、とか、東京大学

卒業だから、とか、大企業の部長になれたから、とかか。その人の内味よりも付帯事項や肩書き等々が重要視してもらえない時代は、終わりました。

だから、「東大入学」や「流企業入社」を目的にすえた「学習」や「教育」のプログラムを子どもに適用する。

それが一番望むべきゴール。それがダメなら「私立の六大学」を二番手に考えてみる……。なんてなことを、あろうことか、これから、21世紀に生きていく子どもたちの上に押し付けるなんてことを、どうぞ、なさらないでいただきたい。

エッ? 東京大学がダメなのかって? とおんでもない。素晴らしい学びやだと思えます。でも、東大卒であつても、それがナンボのもんですかあ?! と言われてしまう世界に、もうすでになっている、というこのことです。

「である」ことが、それほど意味を持ち得ない世の中がすでに始まっています。問われるのは「である」肩書きよりも、小林秀雄さんではありませんが「する」こと、その人自身が「何がしたく」て「何が出来る」て「どんな魂を持った」ヤツなのか。ハダカの内味が問われているのです。

これからの教育は共育で

大学のあり方も、激変しています。あのアメリカのMIT(マサチューセッツ工科大学)が、全講座をウェブ上に公開する、と発表して全世界に衝撃が

走りました。

「留学」というコンセプトもすいぶん変わったことでしょうか。

オヤオヤ、そんなに暗い顔をなさらないで。野中さん、そんなこと言ったら、親の威厳も何もなくなるし、教育プランもどーすりゃいいの? ですって?。

ハイ。教育は、「教えて育てる」と書きますが、私は「共に育つ」と書いて「共育」だと考えています。

何が起きるかわからない時代になつたのですもの、子どもと、常に「一緒に考えながら、共同して学習していき、とらえたらいいかがでしょうか。

ちよいと人類を長めに生きてきただけのこと。子どもに教えられることの有難さを忘れてはいけないと思います。

「笑うこと」子どもと一緒にいつなさいましたか。ごあいさつや、ききわけのよさを説くより、まず、はじめにおススメしたい「国際語」であります。

野中ともよ

フリージャーナリスト。1979年よりNHK「サンデースポーツ・スペシャル」等の番組キャスターを務める。1988年10月に結婚。出産を経て、1992年～1996年テレビ東京系列「ワールド・ビジネスサテライト」メインキャスターを務める。現在、日興フィナンシャル・インテリジェンス(株)理事長を務める他、数多くの政府審議会委員としても活躍中。